

「景観を志した若者はどこへ行ったのか」 調査報告

上田 真紀子¹

¹正会員 工修 八千代エンジニアリング株式会社 (〒161-8575 東京都新宿区西落合2-18-12,
E-mail:mk-ueda@yachiyo-eng.co.jp)

21世紀に入ってから景観・デザイン分野は、景観・デザイン研究発表会や各種のデザインワークショップなど、大学の枠を超えた若手のネットワーク形成の機会が顕著に増えた。これを踏まえ、主に直近10年程度の間景観・デザイン関連の研究室を卒業・修了した若手実務者を対象にアンケート調査を実施し、現在の実務レベルにおける活動の展開や交流の実態、社会人としての景観・デザインに対する意識等を把握した。本稿では、全国130名程度の回答から得られた統計データや自由意見から、実務者・教員・学生にとって有益と思われる事項を紹介する。

キーワード: 景観・デザイン教育, 実務者アンケート, ワークショップ, 若手ネットワーク

1. はじめに

(1) 景観・デザイン分野における若手ネットワーク形成の時代

景観研究の系譜については篠原¹⁾や柴田ら²⁾がまとめているが、近年の景観・デザイン教育の特徴を述べようとすれば、大学の枠を超えた交流の活性化について触れる必要があると思われる。

2004年頃から、景観・デザイン分野の学生を中心とした景観・デザインやまちづくりのワークショップが毎年開催され、学生や若手社会人のネットワークは年々広く、強いものになってきている。また、2005年から開催されている景観・デザイン研究発表会は研究発表の場でありながら、これらのワークショップ等の参加者にとって「年に一度の同窓会」の様相も見せており、大学の枠、地域の枠を超えた交流が行われている。

こういった流れは、2001年に東京大学景観研究室に内藤廣が助教授として就任したことが大きなきっかけとなっていると思われる。内藤が代表となり、公募学生の手作りによる模型で実現したGROUNDSCAPE展は、その後のGroundscape Design Workshop (GSDW), GSデザイン会議, Groundscape Design youth (GSDy) につながっていった。

時を同じくして2001年には、九州の景観を学ぶ学生のネットワークとしてKyushu Landscape League (KL2) が発足している。2005年からはKL2の学生が中心となり九州デザインシャレットが開始された。また東北では、土木構造物の設計競技企画として2004年に景観開花。が開始

された。

これらの活動が発足～定着し、当時の学生が「若手実務者」として経験を積み始めているということが21世紀の景観・デザイン分野の大きな特徴といえるだろう。

表-1 景観・デザイン分野の若手ネットワーク形成に関する主な出来事

年次	出来事
2001～	内藤廣が東大景観研究室助教授に就任 Kyushu Landscape League (KL2) の発足 (九州の景観を学ぶ学生のネットワーク)
2003. 5	GROUNDSCAPE 展 (土木設計家・篠原修と土木の世界で活躍するエンジニア・アーキテクトの仕事を紹介する展覧会: 代表 内藤廣) 公募学生による模型製作が行われた
2003. 7	(参考) 美しい国づくり政策大綱
2004～	Groundscape Design Workshop (GSDW) の開始 景観開花。の開始
2005. 5	GSデザイン会議発足
2005. 6	(参考) 景観法全面施行
2005～	土木学会 景観・デザイン研究発表会の開始
2005～	九州デザインシャレットの開始
2006～	Groundscape Design youth (GSDy) 発足

(2) 若手実務者のフォローアップの必要性

景観・デザイン分野の卒業・修了生が必ずしも景観・デザインに関する実務者となるわけではない。また、「景観を仕事にすることは困難」と感じている学生・教

員も多いように思う。しかし、筆者自身も含め、景観・デザイン分野に学んだ学生たちは、「まちをよくすることや「よいもの・美しいものをつくる」価値観に触れ、高い志を持って社会に出ているという印象はある。その志は景観・デザインにかかわらず様々な分野へ分散して、様々なアプローチで実を結び始めているのではないか。

景観・デザイン分野を学び、ワークショップ等に参加してネットワークを形成した学生らが、卒業・修了後にどのような実務についているか、またその実務の中で学生時代の経験がどのように活かされているかについて、管見の限りではこれまで把握されたことはない。先に示した背景からも、この10年に卒業・修了した若手実務者のフォローアップをすることで、景観・デザインを学ぶ意義を再確認でき、学生の希望ある未来を描くことができるのではと期待し、本調査を構想、実施した。

なお、本稿で「景観・デザイン分野」を定義することははばかれるが、今回調査の対象とした主に土木系の「景観」「デザイン」を冠する研究室卒業・修了生および各種ワークショップ等の応募者である土木・建築・都市計画・造園・ID分野等の大学・専門学校卒業・修了生等を総称して「景観・デザイン分野の卒業・修了生」として論を進める。

2. アンケート調査の概要

(1) 調査概要

調査はインターネット上にアンケート票を構築し、回答ページを対象者に周知することにより実施した。

調査概要を以下に示す。

表-2 調査概要

期間	2011年7月18日～2011年9月2日
調査方法	インターネット上にアンケート票を構築し、回答ページを対象者に周知 <ul style="list-style-type: none"> ・GSDy メーリングリスト参加者へ案内 ・KL2 メーリングリスト参加者案内 ・主に土木の景観・デザイン分野研究室について、各大学教員を通じて卒業・修了生へ案内
回答	130票
主な内容	<ul style="list-style-type: none"> ・属性および経歴について ・景観・デザインに関する実務経験について ・景観・デザインが自分へ与えた影響について ・その他自由記述

(2) 回答者属性

回答者の平均年齢は28.3歳であり、男性が8割であった。修士卒が多く、ほぼ全国を出身地として回答が得られた。なお、調査は匿名で実施しており、必ずしもすべての設問に回答はしていないため、ほとんどの設問で合計が130とはならないが、不明の回答者数は省略する。

表-3 回答者属性

年齢	回答者数	性別	回答者数
～24歳	19人	男性	103人
25～29歳	70人	女性	27人
30～34歳	30人	※修士まで（博士は実務経験として扱う）	
35歳～	11人	最終学歴	回答者数
		学部	29人
		修士	92人

表-4 主な出身大学（複数回答のあったもの）

大学名	回答者数	大学名	回答者数
東京大学	19人	埼玉大学	7人
熊本大学	14人	九州大学	5人
福岡大学	13人	東京工業大学	4人
早稲田大学	12人	九州工業大学	3人
東北大学	11人	高知工科大学	3人
日本大学	8人	千葉大学	3人
京都大学	7人		

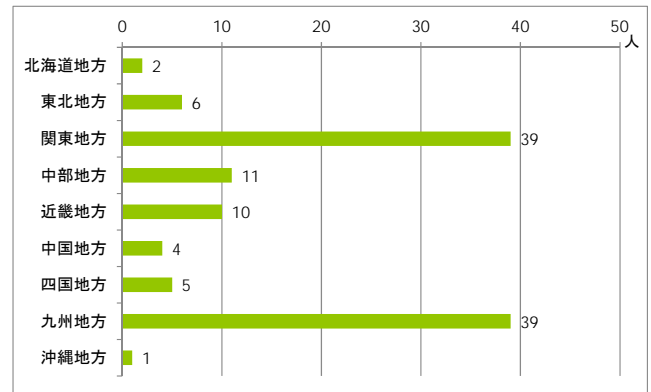


図-1 回答者出身地

回答者の社会人経験年数の平均は3.8年であり、転職回数の平均は0.3回であった。

表-5 社会人経験年数と転職回数

経験年数	回答者数	転職回数	回答者数
0～3年	72人	0回	102人
4～6年	36人	1回	22人
7～9年	13人	2回以上	5人
10年以上	8人		

回答者の9割程度が景観・デザインに関する研究室を卒業・修了しており、その中で何らかのイベントや組織に参加している人は3/4程度であった（図-2）。

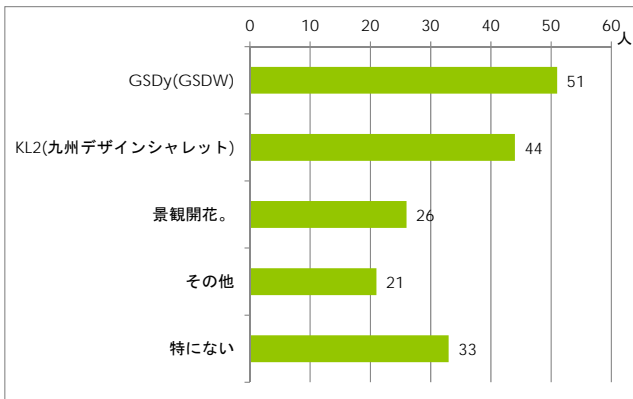


図-2 参加したイベントや組織など（複数回答）

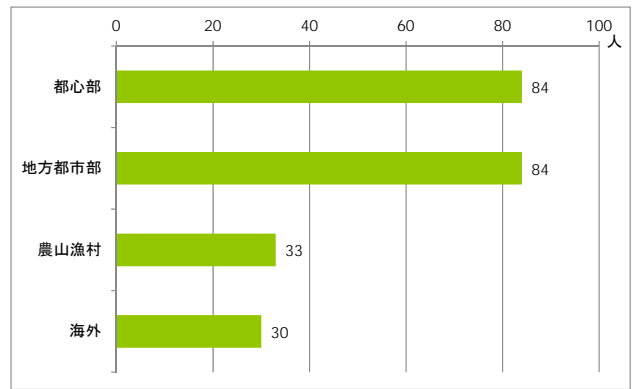


図-5 現在の実務の対象としている地域（複数回答）

3. 調査結果

(1) 実務経験について

a) 専門分野

修士までの最終学歴時と現在の専門分野を比較すると、土木分野の研究室を出たのち、約4割が実務では他分野を専門としている（図-3）。また、建設コンサルタントに従事している回答者が最も多く、次いで地方公務員、建築設計事務所が多い（図-4）。実務の対象としている地域は都心部・地方都市部が同程度で多く、農山漁村や海外を対象としている人も回答者の2割以上であった（図-5）。現在の実務の立場としては、6割以上の回答者がハード（社会基盤整備に関する企画・設計・施工など）に関わっており、4割以上の回答者がソフト（行政計画やまちづくりの仕組みの検討など）に関わっている（図-6）。

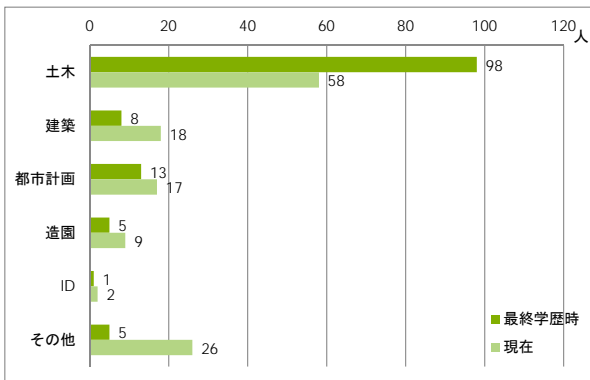


図-3 最終学歴時と現在の専門分野

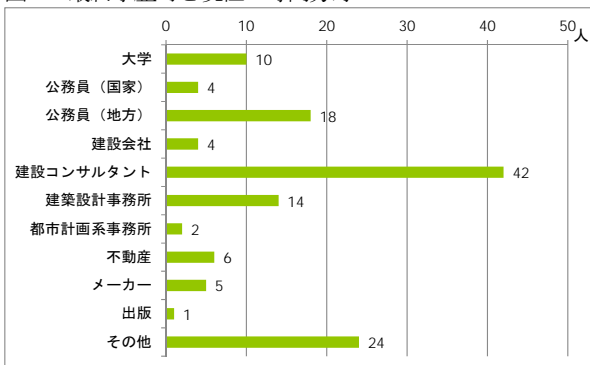


図-4 現在の業種

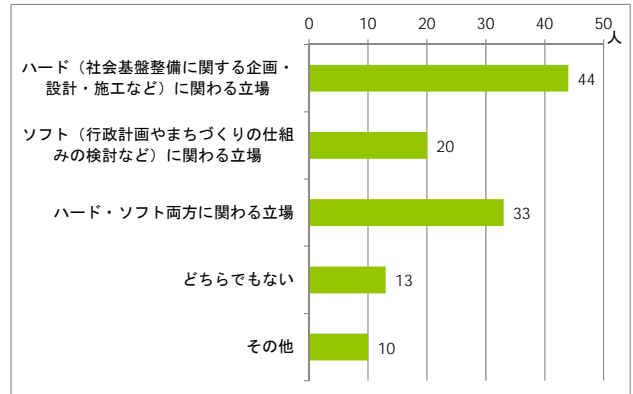


図-6 現在の実務の立場

b) 景观・デザインに関する実務の状況

景观・デザインに関する実務経験は、多く携わっている（いた）、一部携わっている（いた）、間接的に関係する部分がある（あった）、全く関係ないとの回答者がそれぞれ同程度であった（図-7）。

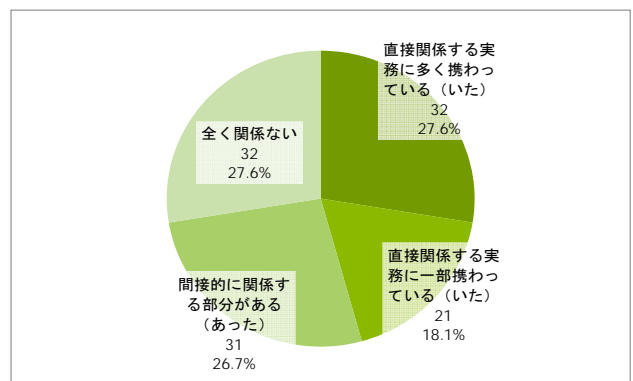


図-7 景观・デザインに関する実務経験（人、%）

回答者の半数以上が、実務で景观・デザインを学んだ時の人間関係と何らかの関わりがあるとしており、特に相談相手（委員会やアドバイザーなど）としての学識経験者や同業者内（上司・同僚など）の関わりが多い（図-8）。

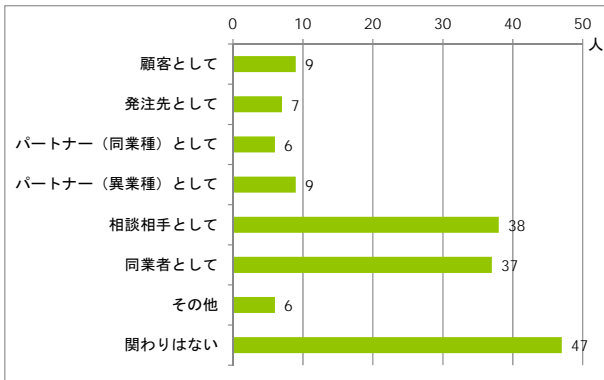


図-8 景観・デザインの間人関係との実務での関わり（複数回答）

回答者の3/4が「今後関係する実務に就く可能性がある」と考えている（図-9）。

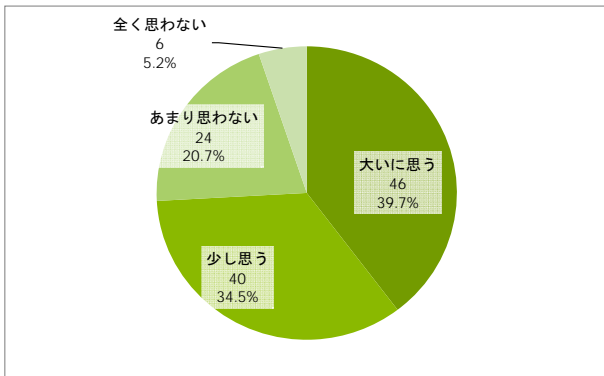


図-9 今後関係する実務に就く可能性があると思うか（人，%）

c) 実務に関する満足度など

6割以上の回答者が「景観・デザイン以外の実務で、景観・デザインを学んだ経験が生かされている」と感じている（図-10）。具体的には、分野横断的・総合的な視座、人中心の考え方、地域性の理解、コミュニケーション力、論理的思考、建設的な発想、相談できる人脈などが挙げられている。

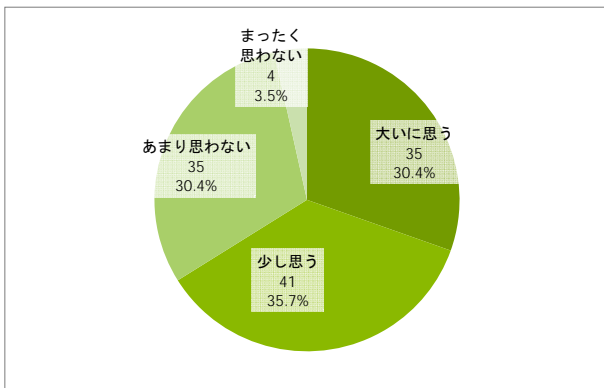


図-10 景観・デザインを学んだ経験が生かされていると思うか（人，%）

半数以上の回答者が「学生時代に思い描いた仕事・研究等ができています」と感じている（図-11）。

また、現在の実務に対し、回答者の7割以上が満足している（図-12）。

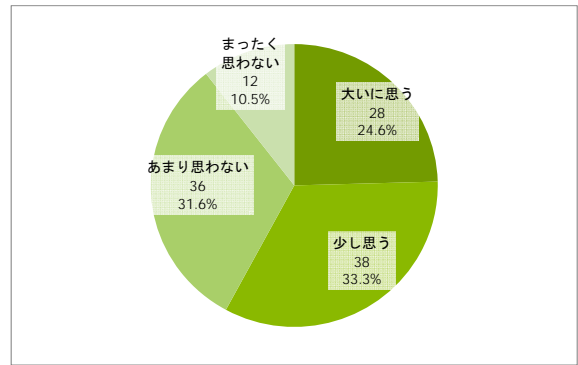


図-11 学生時代に思い描いた仕事・研究ができていますか（人，%）

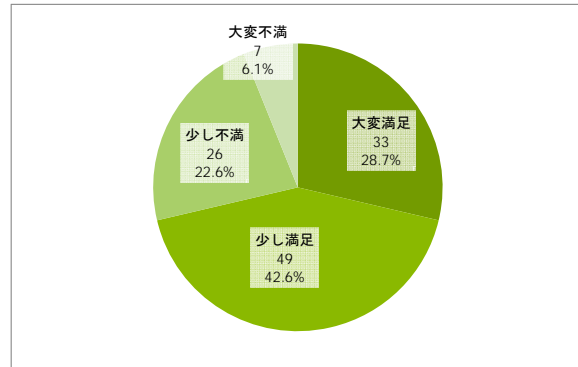


図-12 現在の実務に満足しているか（人，%）

クロス集計を行うと、関係する実務に多く携わっている回答者は「学生時代に思い描いていた仕事・研究ができています」と感じている割合が8割程度であり、関わりの度合いによって「そう思う」割合は減少する（図-13）。しかし、実務への満足度では、「直接関係する実務に一部携わっている（いた）」人の不満の割合は、間接的に関係している人や全く関係ない人よりも高い（図-14）。

不満を感じている理由としては、組織の利益や生産性が優先される、景観・デザイン分野への周囲や社会の理解不足、やりたい仕事になかなか関われない、受注者の立場の低さ、業務の忙しさ、業務内で提案できる機会の少なさ等が挙げられている。また、実務に関する悩みとしては、上記の不満の理由に加え、景観について考えるべき事項であっても実際に検討できないこと、実務者としての自分の能力の不足、業界の展望への不安について多く挙げられている。

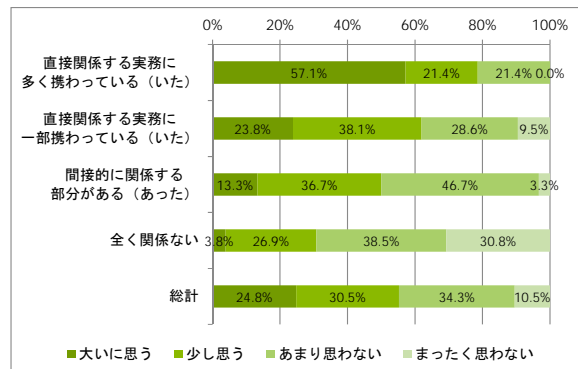


図-13 学生時代に思い描いた仕事・研究ができていますか—実務内容とのクロス集計

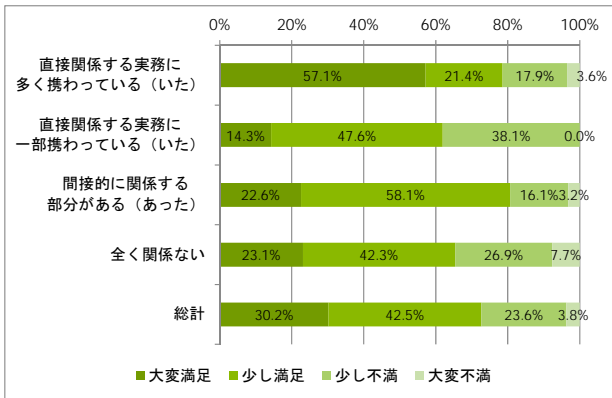


図-14 現在の実務に満足しているか—実務内容とのクロス集計

経験年数別にみると、4～6年の回答者は、学生時代に思い描いていた仕事・研究ができていない割合、実務への満足度の両方で他の年数の回答者より低い (図-15, 図-16)。7年以上の回答者はほとんどが現在の実務に満足している。

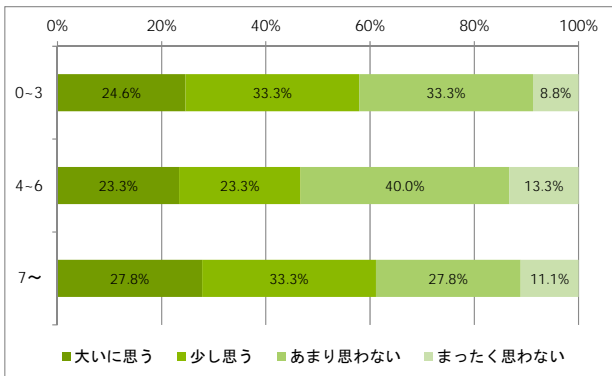


図-15 学生時代に思い描いた仕事・研究ができていないか—経験年数とのクロス集計

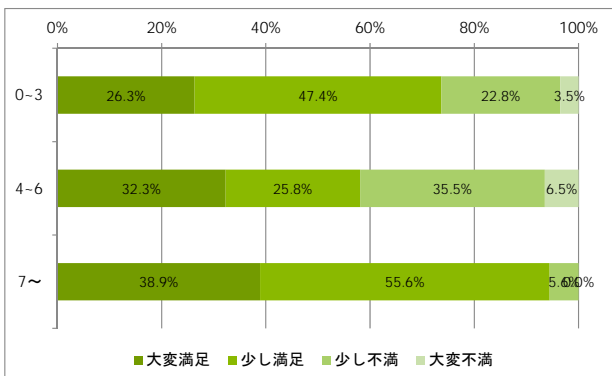


図-16 現在の実務に満足しているか—経験年数とのクロス集計

(2) 景観・デザインが与えた影響について

a) 景観・デザインに関わるきっかけ

景観・デザインに関わることになったきっかけとして、もともと興味のある分野であったという回答のほか、授業等を通じて景観・デザイン分野の教員に出会い、魅力を感じたことを挙げる回答が多い。また、ワークショップ等への参加がきっかけとなった場合も多い。

b) 学生時代の経験

学生時代の景観・デザインに関する特に重要な経験として「ワークショップ・コンペなどへの参加」が挙げられており、次いで「論文の執筆・発表」、「作品やまちなみなどの視察」が重要と感じられている。一方で、「論文や書籍等を読む」、「シンポジウム等への参加」、「大学の講義」を挙げた回答者は少なかった。(図-17)。

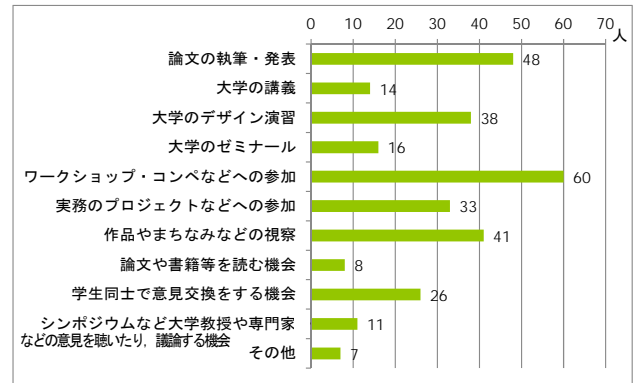


図-17 学生時代の特に重要な経験 (3つまで複数回答可)

「景観・デザインを学んだことが、今の自分に影響を与えている」と感じている人は106人中104人、「当時の人間関係が今の自分に影響を与えている」と感じている人は106人中101人であり、ほぼすべての回答者が景観・デザインへの関わりに影響を受けている。

景観・デザインに関わったことで考え方が変わった点として、深く本質的な思考、より良い成果を目指す姿勢、多角的な視点から捉え疑問を持つ姿勢、行動範囲の広がりに関する回答が多くあった。また、「幸せ」や「生き方」について触れる回答も見受けられた。

大学の卒業・修了後、実務経験を経て考え方が変わった点として、実務として景観・デザインに携わる場合のデザイン・コスト・時間のバランスの難しさや責任、理論と実践のギャップに触れる回答が多く挙げられた。

c) 現在の関係する活動

大学を卒業・修了後、景観・デザインに関する人脈が減少した回答者は2割程度にとどまっている (図-18)。

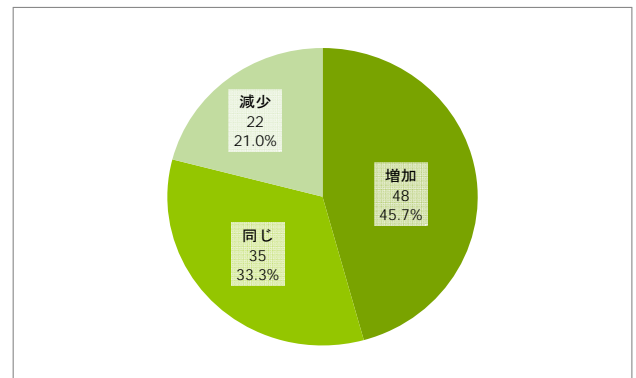


図-18 大学を卒業・修了後の景観・デザインに関する人脈 (人, %)

学生時代との活動頻度の比較では、ワークショップ・コンペへの参加や論文等の投稿は大きく減少しているものの、作品やまちなみの視察は増加又は同程度と回答している人が半数を超える（図-19）。

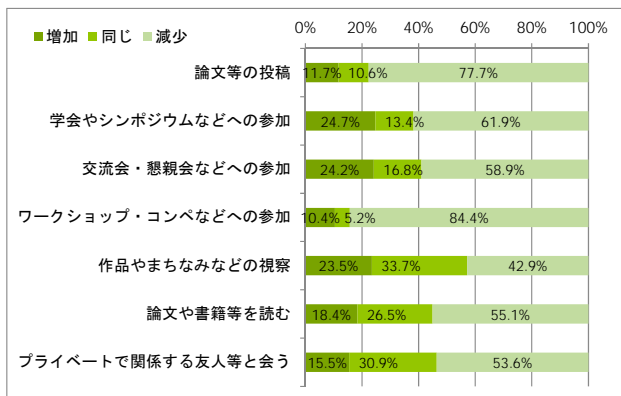


図-19 学生時代との活動頻度の比較

4. おわりに

統計データを踏まえた考察は結果を受け止める立場によって異なると考えられるので、個人に委ねたい。全く別分野に就職した人や、景観・デザインに対してネガティブな想いを持っている人の意見は集めにくいことから、回答には偏りもあると思われるが、実数として80人を超える若手技術者が一部でも景観に関連した実務に携わっている事実、また、実務に対し比較的高い満足を感じていること、多くの学生が景観・デザインを学んだ経験から大いに影響を受けていることは希望が持てる結果ではないだろうか。

個人的には、「作品やまちなみなどの視察」が卒業・修了後も積極的に行われていることを嬉しく感じた。また、経験4～6年の実務者で実務への満足度が下がることについては、自分がそのただ中にいることから興味深く感じる。「仕事ができる喜び」に満足していた時期を過ぎて、本質的な悩みから目を逸らせなくなるというのは、この分野に限らずよくあることかもしれない。

報告しきれない自由意見の中にも示唆に富む言葉が多数寄せられており、何らかの形でフィードバックしていきたい。今回は筆者の個人的な興味から調査を実施したが、このような卒業・修了生への調査を数年おきに実施し、フォローアップしていくことは、景観・デザイン教育の観点からも重要性が高いと思われる。

謝辞：本アンケート調査の実施にあたっては、恩師である佐々木葉教授をはじめ、多くの先生方にメールの転送等についてご協力をいただきました。ありがとうございました。また、非常に長い調査票にもかかわらず、丁寧に回答していただいた若手実務者の皆様にも、深く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 篠原修：景観研究の系譜と展望-風致工学から景観設計へ、土木学会論文集, No. 470/IV-20, pp. 35-45, 1993
- 2) 柴田久, 土肥真人：目的別研究系譜図からみた景観論の変遷に関する一考察, 土木学会論文集, No. 674/IV-51, pp. 99-111, 2001
- 3) 柴田久, 石橋知也：目的別系譜図にみる景観研究の動向-98年から07年を対象として-, 景観・デザイン研究論文集, No. 7, pp. 121-132, 2009